

孟子に於る神秘的一側面とその来源

山室, 三良

<https://doi.org/10.15017/2543232>

出版情報 : 哲學年報. 24, pp. 1-15, 1962-10-20. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :



孟子に於る神祕的一側面とその来源

山 室 三 良

神祕主義は、何らかの意味で、自他合一、万物一体の境界を指すものと言へるであらう。

孟子は

夫れ君子、過ぐる所の者は化し、存する所のものは神、上下天地と流れを同じうす、豈、これを小補すと曰はんやといふ。君子の心に存主する所のものは神しんであり、過ぐる所のものは化する、その働きは天地の働きに等しい、といふのである。孟子は又、

万物、皆、我に備る

といふ。人も知る如く、孟子は人の性を善とするが、上の句の示す所は、人の性は単に善であるばかりでなく、人は一つの小宇宙であるとする。「万物、皆、我に備る」と言ひ、性を知る者は則ち宇宙を知る、とする。

その性を知れば則ち天を知る

といふ。我と宇宙との一体感^三は、孟子の気の考方にも現はれている。浩然の気を、

その氣たるや、至大至剛、直を以て養ひて害すること無ければ、則ち天地の間に塞る

と述べている。^四かかる氣の考方は従来、儒教系統では見られぬものであつた。この氣は後述する様に心と同一視される面がある。浩然の氣は宇宙に塞るとされる。浩然の氣を得た境地は天地と一体の境地である。この様に孟子は心の面からも氣の面からも天地との一体を考へている。かかる孟子の神秘的一面は、一体どこに来源をもとむべきであらうか。

孟子以前では、心は、我々が日常、心が痛む、心が重いなど用いるのと等しく極く常識的乃至は感情的な用例のみである。たとへば、

^{すなは}載ち馳せ、載ち驅り、歸つて衛侯を唁^{とむら}はん、

馬を驅ること悠悠、言^{われ}漕に至らん、

大夫跋涉す、我が心則ち憂ふ（詩鄘風載馳）

彼の黍離離たり、彼の稷これ苗、

行き適^ゆくこと靡靡、中心揺揺、

我を知る者は、我を心憂ふと謂ひ、

我を知らざる者は、我何を求むと謂ふ、

悠悠たる蒼天、此れ何人ぞや（詩王風黍離）

鐘を鼓つ將將、淮水湯湯、憂心且つ傷む、

淑人君子、懷^{いだ}つて忘れず（詩小雅鼓鐘）

我、肥泉を思ふてこれ之を永く歎く、

須と漕^{そう}を思ふて、我心悠悠たり、

駕^わして言^{われ}出遊し、以て我が憂を写^{のぞ}かん（詩邶風泉水）

或は「憂心忡忡」、「憂心慄慄」、「我心傷悲」（召南鵲巢）「実勞我心」（邶風雄雉）、「乘心塞淵」（秦雝）、「憂心且悲」、「憂

心且妯」（鼓鐘）など多数の例があるが、何れも悲しみ憂へ、痛み歎く心に他ならない。書でも、「汝、朕^わが心の困する所を憂へず」（盤庚中）「爾の心未だ愛せず」（多方）などと素朴な心であり、論語の心も亦、時あつてか、矩を踰え、

時あつてか矩を踰えないもの、「回やその心、三月仁に違はず」などと語られるものである。然るに孟子の心は、尽

心、存心、恒心、本心、良心などいふ言葉が示す様に、人間の本源としての心であり、人はそこに反らなければなら

ないもの、九輒の深い泉にたとへられるものである。この心を存しなければ、人は禽獸^{きんじう}を違^{ちが}ふこと遠くない。人本来

のこの良心が、且昼為す所によつて伐られ削られ遂に枯亡するに到ることを告子篇牛山章は物語っている。そこでは

良心が、「夜氣」或は「平旦の氣」として述べられている。「夜氣、以て存するに足らざれば、則ちその禽獸を違ること遠からず」と言はれる。これは人本来「固有するもの」であるから、「赤子の心」とも言はれる。大人とは、

その赤子の心を失はぬものである。この様な例で見る様に孟子は氣と心とを同じものとして取扱っている。しかも他

方では、孟子は氣と心とを対立させ、氣を肉体的のものと考へ、氣は心によつて支配さるべきものとしている。「夫

れ志は氣の帥なり、氣は体の充なり」と述べているのがこれである。元來氣という文字は詩にも書にも無い。論語に

は呼吸の意味と、血氣といふ例^九だけが見えている。これに反して道家系統では氣をよく言ひ、老子書に、「心、氣を使ふを強といふ」(五〇章)と心が氣を支配するのを否定し、莊子も「心を死灰の如からしめる」ことを求め、「之を聴くに心を以てすること勿れ、之を聴くに氣を以てせよ」(人間世)と、氣を心よりも上に置いている。莊子は孟子より二三十年あととされるし、「老子書」の成立も略々その頃と考へられている。孟子が一方では氣を心の下に置きながら、他方では最高の精神的境界に浩然の氣と言っていること、本来の心を、夜氣、平旦の氣など言っていることなどには、孟子が長く滞在していた齊の學の影響が無いであらうか。孟子が、「われ四十にして心を動かさず」と自ら語る(公孫丑上、二)精神に一時期を画した四十才は、既に長く齊に居たあとであり、孟子の齊滞在は前後二回、少くとも廿年を越えている^二。齊の稷下では學者が互に影響しあつていたこと、多数の道家の學者が居たことは史記に記す通りである。傅斯年は、齊の學は道家の學だとすら述べている^{二二}。

齊の功勞者管仲に名を假つた管子なる書物は、「一時の作」でも「一人の作」でもないこと、早くは宋代に述べられているが、しかもその中に前四世紀前後の多くの資料が含まれていることは劉節・羅根沢・フオルケ・ニーダム等によつて研究されて居り^{一四}、管子は或人も言ふ如く、一大齊文化叢書^五と名づけていいであらう。郭沫若は管子中の枢言、白心、心術、内業などの諸篇を莊子天下篇^{一六}その他と比較することによつてこれらを宋軀・尹文の遺著^{一七}とした。郭氏自ら言ふ「この発掘」は既に多数の學者によつて肯定されている。これらの篇は、篇名そのものが示している様に心を問題としている。アーサー・ウェーラーは郭氏とは独立にこれら四篇が同一傾向のものであることを見ぬき、これらの篇に心術派の名を与へた^{一八}。猪飼敬所は、管子補正で、内業とは心術といふのに他ならない旨を述べている。

宋慤は孟子が尊敬を以て話しかけた相手である（告子下、四）。孟子が宋慤等心術派から影響を受けたことは十分に考へ得る。

孟子は耳目と心とを区別し、心の特質を思ふ働きに帰した。^{一九}思ふことは書でも重視され、孔子も思ふことの重要性をくりかへし述べているが、それらでは未だ思ふ働きと心とが自覺的に結びつけられてはいない。孟子は自覺的にそれを結びつけたが、孟子の心の特色は、それよりもむしろ心の微妙、神祕な働きの面にあつた。孟子は「智に惡む所は、その鑿^{うが}つが為なり」といひ、^{二一}心の働きに作為、無理をきらつてゐる。

必ず事とするあれ、^{あらかじめ}正^{ただ}すること勿れ、

心に忘るること勿れ、助長すること勿れ^{二三}

といふ。心は「操れば存し、舍つれば亡ぶ」^{二三}、「求むれば之を得、舍つれば之を失ふ」^{二四}といふ様に努めて存しなければならぬが、しかも助長してはならない。心は「出入時無く、その郷^{むか}ふところを知るなし」^{二五}といはれる様に微妙な作用をする。心を、この様に微妙なものとして把えるのは心術派に共通のものであつた。内業篇に、

引くなく、推すなければ、福、將に自ら帰せん

とあるが、そのあとに、「静なれば、之を得、躁なれば之を失ふ、靈氣、心に在り、一來一逝云云」^{二六}とある様に、福とは靈氣であり、心の中の靈妙な働きである。心術上篇には、「益するなく損するなし」とあり、それを「因」と言っているが、^{二七}この因は孟子の「故」^{二八}に他ならない。孟子は鑿^{うが}つ智を否定したが、それと同じ思想が「過は自ら用ふるにあり」と語られている。^{二九}心術派は曰ふ。「道の天にあるのが日で、人にあるのが心である」^{三〇}。心は身体の君であり、

身体三二の部分は仕事を分担する官吏に比せられる。心は君が位にある様にじつとして居るべきで、臣下である感官が之を乱してはならない。心は神とも呼ばれるが、神は宮居が潔められた時に、来て宿るのである。三三「宮とは心の謂三三」で、宮を潔めるとは心が感官の支配を脱することである。「その宮を潔くし、その門を開とぎす」ともあり、門とは感官のことだとなる。「欲を虚にし、私を去れば、神明、若したがひ存する」のである。三四神は、貴人にたとへられる。三五「館、辟除せざれば、貴人舍やどらず、故に曰く、潔らざれば、神、処らず」と。同じことが、「敬みてその舍はらを除はば、精。將に自ら来らん」三六とあつて、神は精となつてゐる。しかも、「精とは氣の精也」三七とあつて、神と氣とは別のものではない。

心術派は、心が潔められた状態を、内徳とも中得とも述べてゐる。三八物が感官を乱さず、感官が心を乱さないとき宿るものを、神とも、精とも、心の中の心ともいふ。三九「一往一來、能く之を思ふなし」とされるこの心は孟子の「出入時無く云云」、「操れば存し云云」の心に似てゐる。「心の中の心」「心以て心を蔵す」といはれる心は、孟子の存心、本心、良心の心に他ならない。孟子は、「心を養ふは寡欲よりよきはなし」といふが、心術派も、「節欲の道」或は、「五欲を節し」などといふ。四〇「凡そ心の形、過知は生を失ふ」「思は致きはむる勿きに若くはなし、節適の斉なるときは、彼將に自ら至らんとす」四一といふのは、孟子の「忘るること勿れ、助長すること勿れ」といふのに当る。

国語に、「古昔は、民神まじ雜まじはらず」とあるが、旧くは神は人の上にあり、人とは別のものであつた。然るに、心術派の神は、宮を潔める時、来つて舍ると言はれるものの、決して人と別のものではない。「心以て心を蔵す」、「心の中又心あり」などと言はれる様に、来つて宿るものこそ人の本来性なのである。

凡そ心の刑かたち、自ら充おのづかち自ら盈つ、自ら生じ、自ら成る、その之を失ふ所以は、必ず憂樂喜怒欲利を以てなり、能く憂

樂喜怒欲利を去れば、心乃ち反り済なす、彼の心の情かたち、安やす以て寧やすきに利し、煩わづらはす勿く乱る勿ければ、和乃ち自ら成る。
四三

心の本来性は、心を乱しきへしなれば自ら生じ自ら成るのである。孟子の本心、良心も己おのれに固有のもの、孟子は、これを「己に得る」とこと、「己に存する良貴」とを強調して、他に求めることを否定している。「学問の道、他無し、その放心を求むるのみ」である。
四四

心術派では、神は精であり、精は氣であつたが、氣は元來いき呼吸であり、従つてものの生命を意味した。天のうごきは天氣であり、葉草のききめは藥氣に他ならない。かくて人にあつては、氣は肉体的生命であると同時に、人の本質たましひとも考へられるに到つた。呼吸とたましひとを同一視するのはどの民族も共通であつた。英語の spirit は呼吸・空氣を意味するラティン語の spiritus から来て居り、ラティン語の魂 anima は風を意味するギリシャ語の anemos と同根である (Liddell & Scott: Lexicon)。ホメロスでは人の魂は呼吸と共に出入すると考へられ、人の死と共に飛び去るものとされた。旧約では、神が人の形をどろから作り、それに息を吹きこんだ時、人は生命を得、魂ある存在となつたと記されている。

And the Lord God formed man of the dust of the ground, and breathed into his nostrils the breath of life; and man became a living soul. Gen. 2. 7.

新約では、息 Πνευμα とくゝ語は Τὸ Πνευμα と頭文字にされて専ら聖靈 (the Holy Spirit) として用いられてゐる。

さきに述べた様に心術派では氣と神とを一つにしていた。もつとも内業篇に、「天その精を出し、地その形を出す」^{四五}とあつて、後の二氣を想像させる様な所もあるが、

凡そ物の精、此^{くわ}（化？）すれば則ち生と爲る、下、五穀を生じ、上、列星と爲り、天地の間に流^しく、之を鬼神といふ、胸中に蔵する、之を聖人と謂^ふ。^{四六}

とあつて、列星となり、五穀となる一氣の精を離れては鬼神も聖人も無い。「夫れ道は、形を充す所以なり」^{四七}が、他方で「氣は、身の充なり」^{四七}となつて居り、「心氣の形、日月より明かなり」^{四七}が他方で「金心の形、日月より明かなり」^{四七}とあつて、道と氣と心とは別のものではない。呂氏春秋になると、精氣形氣の二つに分れ、^{四八}淮南子では、天氣地氣となり、陰陽魂魄などに分れて来る。^{四八}陰陽二氣説の完成は史記によれば孟子より少しあとの鄒衍によるといふ。^{四九}孟子には陰陽の文字は無い。しかし唯一例、「天地」と熟して、地を天と並列しているから注四五の内業篇の例などと共に陰陽二氣説成立の過程にあるものと考へ得る。何れにせよ心術派では、道と氣と心とが一つに考へられていた。

道、天地の間にある、その大、外無く、その小、内無し、故に曰く、遠からずして、極め難し^{五〇}（心術上）

夫れ道は形を充す所以なり、而も人、固うする能はず、其の往くや復らず、其の来るや舍^をらず、謀乎として其の音を聞く莫く、率乎として乃ち心に在り^{五一}（内業）

是の故に此の氣や、止むるに力を以てすべからず、安んずるに徳を以てすべし……敬守して失ふ勿くば……、万物果^こく^こ（畢）得^{五二}（同上）

この様に一元的である。しかも万物宜しきを得る為には、その氣を敬守しなければならないとする。「定心、中にあ

つて、精の舎となつた時」にのみ、斯くなるのである。それを

正心、中に在れば万物、度を得。……上、天に察かに、下、地に極まり、九州に蟠満す

といひ、又、

氣を搏とること神の如ければ、万物、備つぶきに存五三す

といふ。氣は心であり、天地に蟠満する。氣を搏すること神の如ければ、万物と一つになる、といふのである。更にいふ。

精存すれば自ら生じ、其の外、安榮、内藏以て泉原と為る、浩然和平以て氣の淵となる、淵の涸れざれば四体乃ち

固く、泉の竭きざれば、九竅遂に通ず、乃ち能く天地に窮まり、四海を被ふ、……心、中に全く、形、外に全し：

…之を聖人と謂ふ

五四

かく見て来ると、孟子の原泉、浩然の氣などの思想と意外に近い。内業篇は更に言ふ。

引く勿く推す勿くんば、福將に自ら帰せんとす、彼の道、自ら生じ、藉よりて与に謀るべし、静なれば之を得、躁なれば之を失ふ、靈氣、心に在り、一來一逝、其の細、内無く、其の大、外無し

五五

心の働きは微妙、それは靈氣とも雲氣とも言はれている。

寛恕にして仁、独り其の身を樂しむ、是れを雲氣と謂ふ、意、行くこと天に似たり

五六

とある。これらの句は、口氣も内容も孟子に極めて近い。孟子は次の様にいふ。

万物、皆、我に備る、身に反みて誠ならば、樂しみこれより大なるは莫し、強恕して行ふ、仁を求むる、これより

近きは莫^{五七}し

孟子は万物と我との隔絶は、己に誠でない所から来るとして、もし真の己に誠であるならば万物と一体になり、これより大きな楽しみは無いとする。又、人の本性、仁に到る為には努力して恕（自他一体）に努めなければならぬとする。これは内業篇の、天地と一体になり、独りその身を樂しむ境を、寛恕にして仁ならば到り得るとして居るのと等しい思想である。かくて共に、

正心在中、万物得度（内業）

搏氣如神、万物備存（同上）

万物皆備於我（尽心上）

などと万物一体をいふ。孟子は、「その心を尽す者はその性を知る、その性を知る者は天を知る^{五八}」といひ、又浩然の氣を説いて、心の面からも氣の面からも宇宙との合一を説く。ここに到つては心と氣とは分ち難い。孟子は又、「君子存する所のもは神、上下天地と流を同ふす」と、君子の神は、天地と働きを等しくする旨を述べている。

これら氣、神、心の考へ方や、宇宙と人との合一に見られる孟子の神秘的一面は、彼が数十年遊んだ齊に於て、宋・尹文等を始めとする齊の道家との接觸によつて自らの裡に得來つたものとすべきであらう。

註一、夫君子所過者化、所存者神、上下与天地同流、豈曰小補之哉（尽心上、一三）。

二、万物皆備於我矣（尽心上、四）。

三、尽其心者、知其性也、知其性、則知天矣、存其心、養其性、所以事天也（尽心上、一）。

四、敢問、何謂浩然之氣、曰難言也、其為氣也、至大至剛、以直養而無害、則塞乎天地之間（公孫丑上、二）。

五、吾十有五而志于學……七十而從心所欲不踰矩（為政）。回也、其心三月不違仁、其餘則日月至焉而已矣（雍也）。

六、離婁下、一九及び二八。告子上、八。

七、大人者、不失其赤子之心者也（離婁下、一二）。

八、夫志氣之帥也、氣體之充也（公孫丑上、二）。

九、屏氣似不息者（鄉党）。

一〇、少之時血氣未定……及其壯也、血氣方剛……及其老血氣既衰……（季氏）。

一一、錢穆、先秦諸子繫年考弁。

一二、性命古訓弁正。

一三、葉水心、習學記言。

一四、劉節、古史考存。羅根沢、管子探源。

A. Forke: Geschichte der alten chinesischen Philosophie.

J. Needham: Science and Civilization in China, Vol. II.

L. Maverick: The Kuan-Tzu.

一五、張默生、先秦諸子文選

一六、……以此白心、古之道術、有在於是者、宋惺尹文聞其風而說之、……語心之容、命之曰心之行、……以情欲寡淺為內（天
下篇）。

参照 心之容、心之形（心術篇）、心之刑（内業篇）、心之情（同上）

一七、宋惺尹文遺著考（青銅時代）、稷下黄老批判（十批判書）。

孟子に於る神秘的一側面とその來源

一八、The Way and its Power.

一九、耳目之官不思、而蔽於物、物交物則引之而已、心之官則思、思則得之、不思則不得也（告子上、一五）。

二〇、惟聖罔念作狂、惟狂克念作聖（多方）

二一、天下之言性也、則故而已矣……所惡於智、為其鑿也、如智者若禹之行水也、則無惡於智矣、……如智者亦行其所無事、則智亦大矣、……天之高也、星辰之日至、可坐而致也（離婁下、二六）。

二二、必有事焉而勿正、心勿忘勿助長（公孫丑上、二）。

二三、孔子曰、操則存、舍則亡、出入無時、莫知其鄉、惟心之謂與（告子上、九）。

二四、求則得之、舍則失之（告子上、六。尽心上、三）。

二五、注二四

二六、勿引勿推、福將自歸、彼道自来、可藉與謀、靜則得之、榮則失之、靈氣在心、一來一逝、其細無內、其大無外（內業）。

二七、因也者、無益無損也（心術上）。

其心非所設也、其動非所取也、此言因也（設||孟子的正?、取||孟子的助長?、心術上）。

感至後心、非所設也、緣理而動、非所取也、過在自用……故道貴因（同上）。

二八、注二一

二九、注二七

三〇、道之在天者曰也、其在人者心也（極言）。

三一、心之在體、君之位也、九竅之有職、官之分也、心處其道、九竅循理（心術上）。

三二、虛其欲、神將入舍、掃除不潔、神乃留處（心術上）。潔其宮、開（^{トザス}闕）其門、去私勿言、神明若存（同上）。

三三、宮者言心也、……門者謂目耳也（同上）。

三四、注三二及び三三。

三五、館不辟除、貴人不舍焉、故曰、不潔神不処（心術上）。

三六、敬除其舍、精將自来（内業）。

三七、精也者、氣之精也（同上）。

三八、毋以物乱官、毋以官乱心、此之謂内德（心術下）。

不以物乱官、不以官乱心、是謂中得（内業）。

注 内業篇には「内得」といふ文字もある。これらは孟子告子上篇の、耳目之官、心之官の考方に比せられる。

三九、不以物乱官、不以官乱心、是謂中得、有神在身、一往一來、莫之能思。失之必乱、得之必治、敬除其舍、精將自来……得之勿捨……心以藏心、心之中又有心焉（内業）。

四〇、養心莫善於寡欲（尽心下三五）。

節欲之道、万物不害（内業）。

節五欲、去其二凶、……凡人之生也、必以平正……内静外敬、能反其性、性將大定（内業）。

四一、凡心之形、過知失生（心術下及び内業）。

思莫若勿致、節適之齊、彼將自至（内業）。

四二、古昔、民神不雜（楚語下）。

四三、凡心之刑、自充自盈、自生自成、其所以失之、必以憂樂喜怒欲利、能去憂樂喜怒欲利、心乃反濟、彼心之情、利安以寧、

勿煩勿乱、和乃自成（内業）。

四四、學問之道無他、求其放心而已矣（告子上二）。

四五、人之生也、天出其精、地出其形、合此以為人、和乃生、和不生。

孟子に於る神秘的側面とその来源

四六、凡物之精、此則爲生（息軒に従つて此を化と解したが、此のままでも通ずる）、下生五穀、上爲列星、流于天地之間、謂之鬼神、藏於胸中、謂之聖人（内業）。

四七、夫道者、所以充形也（内業）。

氣者、身之充也（心術下。孟子に氣者体充也とある）。

心氣之形、明於日月（内業）。

金心之形、明於日月（心術下）。

四八、万物皆有精氣、有形氣（呂氏春秋、尽数）。

清陽者薄靡而爲天、重濁者凝滯而爲地（淮南子、天文）。

天氣爲魂、地氣爲魄（淮南子、主術）。

四九、卷七四。

五〇、道在天地之間、其大無外、其小無内、故曰不遠而難極也（心術、上）。

五一、夫道者、所以充形也、而人不能固、其往不復、其来不舍、謀乎聞莫其音、率乎乃在於心（内業）。

是故此氣也、不可止以力、而可安以德……敬守勿守……万物果（畢）得（同上）。

五二、定心在中、耳目聰明、四枝堅固可以爲精舍、精也者、氣之精者也（内業）。

五三、正心在中、万物得度……上察於天、下極於地、蟠滿九州（内業）。

搏氣如神、万物備存（同上）。

五四、精存自生、其外安榮、内藏以爲泉原、浩然和平、以爲氣淵、淵之不涸、四体乃固、泉之不竭、九竅遂通、乃能窮天地、被

四海、……心全於中、形全於外、……謂之聖人（内業）。

五五、勿引勿推、福將自歸、彼道自来、可藉与謀、静則得之、躁則失之、靈氣在心、一来一逝、其細無内、其大無外、所以失之、

以躁為害、心能執靜、道將自定（内業）。

五六、寬恕而仁、独樂其身、智謂雲氣、意行似天（内業）。

五七、万物皆備於我矣、反身而誠、樂莫大焉、強恕而行、求仁莫近焉（尽心上、四）。

五八、注三。

（管子よりの引用文はすべて安井・管子纂詁による）

附記 本研究は文部省三十六年度科学研究費による「老莊研究」の成果の一部分である。（昭和三十六年十二月）